

育児しているけど仕事もしています



橋 熊野

群馬大学大学院理工学府／群馬大学食健康科学
教育研究センター
[376-8515] 桐生市天神町 1-5-1
准教授, 博士 (工学).
専門は高分子化学, 環境材料.
tachibana@gunma-u.ac.jp

greenpolymer.chem-bio.st.gunma-u.ac.jp

桐生で暮らし始めてから2年が過ぎようかとする頃、大学業務が無事に終わってホッとしていた夜中に妻が破水し、早朝には無事に娘が生まれた。お父さんに最初に会いたいから、仕事が終わるまで生まれるのを我慢してくれていたと信じている。

妻も同業者のために、生後6カ月から娘の保育園生活が始まった。群馬大学理工学部がある桐生市は待機児童問題と無縁で、群馬大学の近くの保育園に預けることができた(ぜひ、育児中・育児希望の研究者は群馬大学に赴任してもらいたい)。保育園に通っている間は、私がラフな格好で歩いて送り迎えし、保護者会にもよく参加するので「お父さんってお仕事されているのですか?」とお母さん方から聞かれることがよくあった。また、子育てについて発表していると、「育児しているというのは言葉だけで、本当は何もしてないでしょ」と女性の方から言われたこともよくあった。男性が育児をするということに対して、違和感を感じている人の意識改革が大事だと感じた。

育児をしていて大変なことは、突発的な病気や夫婦ともに出張あるいは仕事で遅くなる時である。地元の人には祖父母や親戚など頼れる人が何人もいるが、私たち夫婦は二人とも関西出身で周りに手助けをお願いできる人がいない。幸い病気らしい病気で保育園を休んだのは数回で、仕事のコントロールがしやすい私が日中の対応をして事なきを得てきた。一方、出張や夜遅くの仕事がお互いに入った場合はどうしようかと悩んでいた。自分たちが当事者ではなかったときは気にも留めていなかったが、今は、ある規模以上の学会だと託児所が併設されている。高分子学会にも娘同伴で参加することが多く、私が子供を連れての会場散策や、学食での食事の場面を見かけた方も多いと思う。学会の託児所には娘はすぐに慣れて、ほかの子とも仲良く遊んで楽しんでおり、朝は「学会に早く行こうよ!」と駄々をこねられるのが恒例行事であった。残念なのは、私の関連学会では子供が数人であることである。ところが、妻の関連学会は高分子学会よりも小さい規模の学会にもかかわらず、数十人の子供たち(0歳～小学生)

が託児所に預けられている。この違いの原因は、私の関連学会は男性教員が主であるのに対し、妻のほうは女性が主だからだ(高分子学会で託児所を利用の際でも、私以外はお母さんが連れてきていた)。子育て中の男性研究者(特に、妻も働いている人)には、高分子学会に子連れで気軽に参加して欲しい。また、小学生でも安心して連れて行けるように、学会を土日開催にして、育児中の先生は発表日程を無条件で土日に選択できるようにする。そして、「お父さん」が発表中に、子供だけで参加できる科学教室を開くのはどうだろうか?

娘が生まれて大変なことも多いが、娘という時間が一番のストレス解消となりメリハリが出てきている。そのおかげか、娘が生まれた後から予算が採択され論文も出だしているの、タイトルにあるように、育児しながらちゃんと仕事もして両立していることは証明できているかと思う。

私がこのように育児と研究教育を両立できているのは妻の協力に加えて、研究室の先生方や学生、周りの教職員の方々の理解があつてのことである(心の中は知らないが)。学生たちには「ごめん、娘を迎えに行かなあかんから」と、途中でディスカッションを切ったりするのも日常となっている(むしろ延々とディスカッションしなくていいので嬉しい?)。将来、子供ができたときに女子学生には「男性にも育児をどんどん任せる」、男子学生には「女性だけに育児を任せるべきではない」という考えをもって欲しい。また、娘が生まれた頃に群馬大学の男女共同参画室が充実してきており、いろいろな相談ができる体制があるというのは見知らぬ土地で子育てしている私たちには心強い。

育児と仕事を両立できるかと言われるが、「教育・研究・大学業務・学会活動を両立できるか?」と同じ課題である。そこに「育児」が加わるだけである。お父さんお母さん、そして子供が協力して、自分たちができる最大限のことをすればいいだけだと考える。そうなのだ、私たちが仕事をするうえで一番の協力者は、毎日夜遅くまで学童保育で寂しい思いをしながらも待っていてくれる娘なのである。